

図書館ニュース

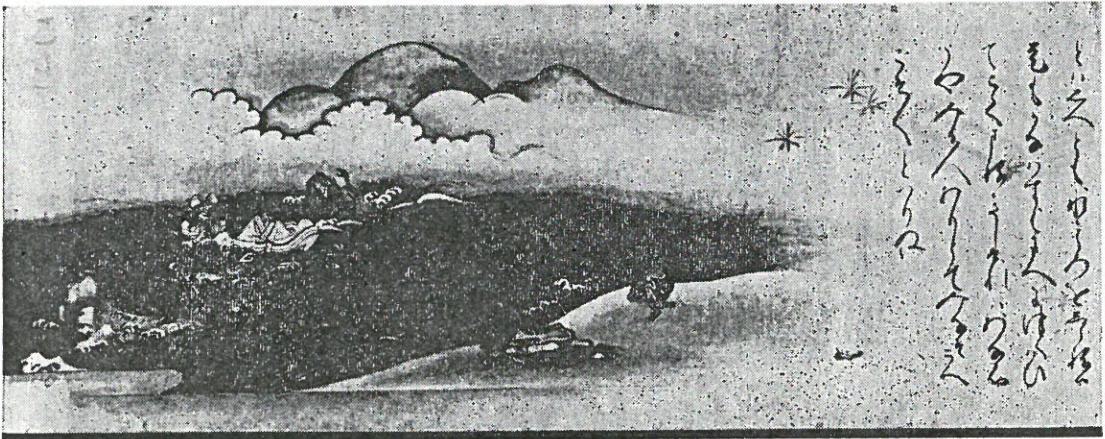
No. 3

1967

42・1・10・発行

発行人 園田 義道

発行所 東京都文京区白山5丁目28番の20号 東洋大学附属図書館



(大和絵風 絵巻『をこせ』の一部)

購入係に望む

東洋大学長 矢野 禾 積

ペリカン本の一冊に、ジョージ・ウォットソンといふ人の「文芸批評家」と題するものがある。一九六二年五月に出た本である。いつ頃日本に来たかその辺は明でないが、とにかく私の最も関心を払ってゐる人々を論評したもので、早速一本を買っておいた。ところが、例によって、中味を全然読まず、そのまま他の本の下積になつてゐたので、一年後に出た大型のいはゆる図書館版を購入した。そして、ふとこの書物は購入済である事に気づいたので、返本しようかと、念のため、巻頭の新版の序を見ると、ペリカン本に多くの増補訂正等を、本文のみならず巻末の書誌に迄施したと断つてあるので、返品どころではない、この方こそ一層重要である事を知ると共に、著者の考へ方が一年の間に、どのやうに変わったかを見るためには、ぜひとも両方を手許におく事の必要を感じたのであった。

これと正反對の例は、ステイヴン・グキンといふ人の編纂したイエイツ追悼録に見られる。初版は一九四〇年“Scattering Branches” “手向の花”といふ題で出た。ところが最近——と言っても昨年のものであるが——同じ人によつてWilliam Butler Yeats といふ本がアメリカの別の木屋から出たので、早速取寄せて見ると、表題も、本の形も、発行所も違つてゐるが、序文によつて、中味は、旧版其儘である事を知つた。

専門家を以て任ずる者にして往々このやうな目に遭ふのである。かうした点に十二分の注意を払ひ、時には返品、時には購入する事こそ、図書館の購入係の役目である。私はその職に在る人々にこれ位の積極的な援助を望む。

図書館について思うこと

千葉雄次郎

図書館というと、図書類を蒐集、整理、保存しているところだと、従来から図書館側も利用者側も考えなれて来たが、近ごろの図書館というものに対する考え方は、もっと積極的に利用者側にサーヴィスするという面が強くなってきているらしい。アメリカの大学図書館などで、教授からの電話で可書がすぐ該当の書籍の該当の箇所をさがし出すのを見て感心することがあるが、大学図書館などではこれと、利用者である教員学生が、どうしたら一番能率的に有効に書籍や資料を利用できるかを中心に考えて行くべきだと思う。そんなことはいわずもがなのことであるが、実際はこれがなかなかむずかしい。ある書籍や定期刊行物の、一番利用度の高い特定の研究者の便を考えれば、その書籍をその人の手許に置けば一番都合がいゝわけだが、それでは他の利用者にとって一番都合がわるいことになる。抽象的に考えれば、だれでも平等にサーヴィスできる中央集権的な中央図書館に全部の書籍を集めておけば、いゝように思えるが、それが時にはもっとも非能率なものとなってしまふことは大学の先生方なら皆知っていることだろ

う。だから現状がいゝなどゝいうのではない。もっと能率的で有効に、そして公平に図書類を利用できるためには、図書館をどういう組織にし、構造にし、どう機能を發揮させるか、を図書館新築を前に真剣に考えてほしいし、そのためには、図書館側も利用者側も従来の考え方から脱皮する必要のある面もあらうと思う。最後に、図書館とか、研究室とかいうものは、それらしきものをつくれれば目的が達せられるというものではない。目的を考えて、それらの施設をどこに、いかに設けるべきかを考えるべきだと思う。忌憚なくいえば、本学では教室すらももっとも不適當に配置され、勉学の支障となっている場合が多い。これは本学の地理的条件についていうのでなく、学内的に処理できる問題であることを付記しておく。

(社会学部長)



書物への愛憎

桶谷秀昭

いつだったか、たまたま乗り合せた国電の中で、石畑良太郎さんと雑談の折、「あなたは書物にたいする物神崇拜のよなものを感じるか」といった意味のことをきかれて、とまどったことがあった。そのとき、おもわしい返事ができず、話は自然にそれていったが、あるもどかしいおもいに、しばらくとらわれつけていた。

いまでも、そのときとまどいを正確にいうことはできない。ただ、そのとき、石畑さんの言葉に触発されてうかんだ疑問は、一つは、いわゆる愛書家とは書物を物神崇拜する人間と同じであるかどうか、第二は、じぶんは、愛書家と、非愛書家(あるいは憎書家)というものがいるとして、どちらに属する人間なのか、また、どちらにも属さないとしたら、どちらの側に近いのか、といったような問題だった。私は明確に答えることができなかったのだが、それは、私の書物に対する態度が一貫していないことに原因があるらしい。

学生るとき、金に困って十冊ばかりの本を叩き売った。その金は必要を満すのにいくらか足りず、結局、呑んでしまった。ある友人がやはり困って本を売り、「片腕をもぎとられるおもい」といった。彼は呑まなかつたらしいが、要する

に私は「片腕をもぎとられるおもい」に堪えられず、呑んでしまったのだ。逆に——ということになるかどうか——、学校を出て、話にならぬ貧乏をしていた頃、昼めしを幾日か抜いて一冊の本を買った。そういう本には、強い愛着と憎悪を抱いた。用が済んだら叩き売ってやりたい衝動と、ゆえしならぬ所有欲のあいだで、揺れた。

私のいまでもって抜けぬある思まわしい習癖は、その頃に身についたらしい。それは、なるべく本はきれいによみ、傍線を引いたり、頁を折ったりするかわりに、丹念にノートする、のである。将来、叩き売る際、なるべく高く売れるようにとの配慮からだ。その配慮はやがて習癖に化した。しかし、私は、書物に対する所有欲はかなり強い。人から借りてよかつた本は、あとで買うことが多い。図書館を利用することは極端に拙劣である。困ったことだとおもう。

おまえは愛書家なのか憎書家なのか、その両方であるのか、と問われれば、またも返答に窮し、遂に、所詮、じぶんの本への愛憎は、物神崇拜の一種かもしれない、と自己嫌悪をもって答えなければならぬかもしれない。

(文学部専任助教)

指定図書について

望 月 武 夫

．．．ひとこ．．．

新制大学の教育方法の特質の一つとして、指定図書制度が考えられたが、その必要性を感じながらも実施には予算や運営方法に種々の問題点があったので、積極的に推進することなく、形式的に指定図書制度を取ってきたのが、各大学図書館の態度であった。しかしながら今度新たに、法令化されようとしている。大学設置基準改善に伴ない図書館設置基準も改善され、現行の基準になかった指定図書制度が、はっきり明記され必要性が強調される様になってから各大学とも急速に本腰を入れて検討し実現に努力する様になった。本学図書館においては、数年前からこの制度の取り入れを考え、毎年、年度始めに先生方に、指定図書の購入指定依頼をしてきたが、指定図書の概念が徹底しなかったためか、その目的にほど遠いと思われる指定の基に、千差万別に図書の購入がされてきた。

図書館の動き

今後は十分理解の上に乗った統一した購入をし指定図書本来の目的達成に努めたいと考え、こゝに指定書とは何かという概念を再確

認の意味で、定義づけを「大学資料二十号」から纏めてみると、教員が講義に直接関連して学生に必読すべきものとして指定し、多くの場合試験、演習等の際にはその内容も出題の対象となる「教員指定学生専用図書」をいうので、教科書、参考図書のごときは含まれないのである。教員は指定図書の内容を勘案しながら講義を行ない、教員、学生、図書館が一体的関係をもつて運営されるのがこの制度であり、期間内に多数の学生が同一の図書を読まねばならない性質上、同一種類の図書を重複して準備すべきものであり、施設計画要項には全学生定員の四倍程度の指定図書の準備が適当とされている。

本学の指定図書数は現在一、五〇〇冊位あるが全学生定員の四倍となると、白山だけで二五、二八〇冊の準備がなければ新制大学の単位制教育の教室外での自学自習を効果的に行わせる場としての図書館機能が果たされていないことになる。この意味において指定図書制度の理念を十分理解頂き教育効果の高揚のために一段の協力をお願いする次第です。

(図書課長)

巻架印というのがあります。仕事の小道具で、空欄が三つ、その下に年・月・日と番号の欄が二つ。この五欄一組の印は、無記入の姿そのままに、いずれ書きこまれることを予想した枠どりにすぎません。しかし大切な役割が二つ。

①分類記号の記入(Ⅱ書庫内で番地に当る)

②受入の日付と番号を記入(Ⅱ図書館の戸籍番号に当る)

したがって、文字が書き込まれるまで空欄は空欄でなければならず、破損や事故にあっても簡単に消滅されてはこまるのです。

この目的のために、私達は次のような約束を守ってきました。

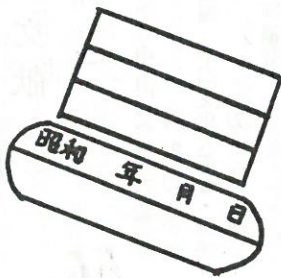
①捺印箇所は、本文または関連した内容の最終頁に。(遊び紙や広告の欄におさない)破損や複製本の際はカットするから)

②捺印箇所は、本文または関連した内容の文字とかぶらないように。(記入不可能になるから)

ところが、こしはばらく前から、この巻架印さまの御乱行が目立ち、私はふらふらしてしまいました。目指すところに不在なのです。索引文字の上にあぐらを

かいたり、遊び紙の上へ踊り出たり、そのたびに神経質な私は、定規とペンで書き写す作業がしばしばでした。一事が万事、小さな不注意が仕事をつくるの類です。しかし、捺印された方がいけないというつもりではありません。

日々、あまりにも忙しく、無反省にすぎることが問題なのです。そういう御時勢が問題なのです。目的そう失の仕事、不統一な仕事……その中で同じようなケースが統発しているのです。だから「考えましよう、皆さん」手許の仕事がどこへつながらのか？ そしてぐっとたずなをひきしめましよう。誤りがあつたらなおしましよう。そのために仕事の手をやすめるのも必要なことの一つだと、私はおもうのです。(M・M)



新着本の紹介

本書の原典は、一九六一年三月より翌年九月まで「北京晩報」に連載された、元中国共産党北京市委員会書記鄧拓のエッセイ「燕山夜話」と、一九六一年十月から翌年七月まで、中共北京市委員会機関誌「前線」に連載された、鄧拓・吳晗（元北京市副市长）、廖沫沙（中共北京市委員会統一戦線部長）の三名が呉南星という合同筆名で執筆した「三家村札記」であり、その二種の隨筆集から、主要なるものをピック・アップ

燕山夜話（毎日新聞社訳編・同社刊）

プし、訳出したものである。本書の内容は、中国の古典・史実・伝説・故事等を引用し、社会生活、政治、文化、風俗一般を論じた隨筆が主となっており、どちらかといえば、林語堂等が一九三〇年前後に現実諷刺を目的として、雑誌「論語」等を中心に行った小品文運動とも通ずる、中国の学者文人の伝統的な諷刺文学の系譜にあるものといえる。従って、これを何等の背景上の考慮なく読んで、その学識や、サタイアに、ある種の興味をもつことはできる。しかし、本書が特に著名となったのは、衆知のごとく、現在中国

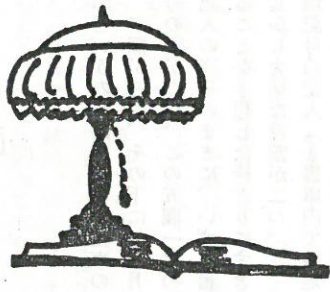
で進行中の社会主義無産階級文化大革命の中で、もっとも悪質な党中央批判攻撃の反党反社会主義の文書として、徹底的に攻撃批判され、文化大革命爆発の導火点となったからである。今中国で批判されている、田漢、夏衍等の文学者グループ、北京大学を中心とする学者グループ、周揚を中心とする党文化部門のグループ等は、すべて一九六一年前後の文書、言動をその攻撃の材料とされている。このことは、一九五八年の党中央の三面紅旗政策（総路線、大躍進、人民公社）に対する智識人、党官僚組織等の反

撃が、きわめてさかんであったことを物語っている。「夜話」と「札記」に示された諷刺が、この当時の党中央の決定に對するものでなかったとは、いえないようである。「偉大的空話（大詩人ぶった子供の詩）」「歡迎「雜家」（得がたい雜家知識）」「生命的三分之一（生命の三分の一）」等の諸篇には、明らかに、党中央の独裁や冒険を批判する智識人の「良識」が見える。しかし、本書に併載された、姚文元の「評三家村」（一九六六年五月一〇日上海解放日報）をよめば明らかのごとく、今回の文化大革命は、正に

こうした「良識」的智識人の体制を打ちこわし、労働者、農民、兵士という階級を、それにかわる智識人にしていこうとするところに一つの大きな目的があるのであろう。そして、既存の文化學術体制や官僚機構に對し、広範な無産者智識人を支えとして戦いをいどんでいる毛沢東コースの姿勢をよみとることが出来る。このような「近代的」インテリと、「労働兵」インテリの相克対立を知り、中国の人間革命、精神革命の斗いを知るためにも、重要な資料となる。筆者は本夏中国で本書の原典を探したが遂に果せなかった。そうした資料的価値や、ニュース性の故に、本書に菊池賞が与えられたものといえよう。

文学部専任助教

金岡照光



文化大革命 関係文献

ほ

（邦文）

- 福島正夫編 中国文化大革命 御茶の水書房
- 刀江書院編 中国文化大革命・論評 刀江書院
- 中島嶺雄編著 中国文化大革命―その資料と分析― 弘文堂
- 外文出版社 文化戦線にかける大革命 外文出版社(北京)
- 外文出版社 中国の社会主義文化大革命第一―五集 外文出版社(北京)
- 外文出版社 プロレタリア文化大革命を最後までおしすすめよう(日本語版) 外文出版社(北京)
- 金敬邁 「欧陽海の歌」(上、下) 伊藤克訳 徳間書店
- 刀江書院編集部編 毛沢東・林彪路線 第一―二巻 刀江書院
- 安藤彦太郎 中国通信 大安
- 毛沢東語録 宮川書房、いずみ書院
- 新島淳良 毛沢東の哲学 勁草書房、アジア・アフリカ叢書
- 森信成 毛沢東 実践論 批判 矛盾論 刀江書院

貴重書から

ヲコゼというのは、まことに醜いかたちをした魚である。そのヲコゼが、どういふわけか、山の神の好物であると伝えられている。山の神は醜いので、これをあげると、自分の方がましだといって、たいそう喜ぶともいうが、本当のことはわからない。山の神とヲコゼとの関係は、民俗学上の好題目として、柳田国男氏の『山の神とヲコゼ』、淡沢敏三氏の『日本魚名の研究』、堀田吉雄氏の『山の神信仰の研究』など

をこせ

に取りあげられている。

本館所蔵の『をこせ』と題する絵巻一軸も、そのような古伝にもとづいて作られたものである。ひろい意味のお伽草子の中でも、『あぐろふち』や『のせむら草子』などと同じように、異類を主人公とした恋愛物に属するといえよう。そのあら筋をたどると、山の神がヲコゼの姫を見そめ、カハウソのなかだちで文を通わせる。タコの入道が怒っておし寄せると聞いて、ヲコゼの姫

ん

怒っておし寄せると聞いて、ヲコゼの姫

は山の中のがれ、首尾よく山の神と結ばれるという。表紙に掲げたのは、山の神が海辺に出て、ヲコゼの姫を見そめる場面である。全体にユーモラスな書きぶりで、異類物の佳作といつてよい。その末尾に、「世の中のいふことに、あながちにもをみて喜ぶをば、山の神におこぜみせたるやうなりとぞ申し伝へたる」とあるのも注目される。「山の神にをこせ見するがごとし」というのは、『毛吹草』などにもとられたことわざである。ここに取りあげた『をこせ』は、『松姫物語』や『あやめのまへ』などととも

(表紙絵解説)

に、島津久基博士旧蔵のお伽草子の一つ。江戸初期の写しであるが、五つの絵は大和絵風で、まことに美しい。その本文もとのつており、島津博士編、市古貞次博士校訂の岩波文庫本『続お伽草子』に翻刻されている。同じ作品の伝本としては、ほかに湯川富三郎氏蔵の屏風絵(南方熊楠氏著『南方随筆』および前記『山の神とヲコゼ』所収)、高安吸江氏蔵の奈良絵本、横山重氏蔵の絵巻を挙げることができる。

文学部兼任講師

大島建彦

— 館員のコラム —

読書と音楽

音楽を聞きながら読書をすれば能率が上がるかどうかという問題は面白い。一般的には学術書は別にして小説等を読んでいる時にはあまり刺激的でなく落着いた明るい曲、例えばベートーベン「田園」モーツァルト「ハフナー」シューベルト「未完成」ドボルザーク「新世界」グリーク「ペーブルギェント」等が適当であつて、ベートーベン「運命」チャイコフスキー「悲愴」は避けるべきであろう。又読書に疲れて一休みしている間に聞く曲としてはサンサーンズ「白鳥」シューマン「トロイメライ」サラサーテ「チゴイネルワイゼン」ドボルザーク「ユモレスク」等クラシックの小品、それもピアノ曲やヴァイオリン曲がいい。ポピュラーは刺激的でない曲なら聞ける。ともあれ、読書中音楽をあまり意識しないでしかも美しいメロディの流れに乗って気分が爽やかになり読書の能率が上がり疲れを感じさせず、しかも消化をも良くするとすれば読書人にとって音楽こそ必要不可欠のものとなりうるだろう。(島田記)

分館だより!

工学部分館は豊かな自然の環境に恵まれ、明るい閲覧室では学生達が思い思いに読書に耽っている。と云うとのかであるが、実は一人一人が、日進月歩の工業の進歩を荷うべき重荷を負って奮闘しているのである。これらの閲覧者たちに充分なサービスをするには、現在の図書館ではあまりにも微力であることとを館員一同痛感している。しかしその中でも図書館は少しずつ前進しているのである。

その一環として、こんど岩波文庫の全巻が購入されることになり、その一部は既に閲覧室にお目見えしている。また新たに、人文・社会科学系の図書がかなり購入され、近く閲覧貸出しに出ることになっている。これらによって幅広く一般教養の学問のためにも足場が与えられることを期待している。尚特記すべきことは、こんど閲覧室と参考室とにスチール製の新しい書架が入り、更に多くの図書を開架に供し得ることになったことである。今後図書館がよい奉仕をなすために、皆様の御援助をお願いする次第です。(中村記)

ドイツ図書館の広域性

園 田 義 道

一九六六年七月十五日から九月末日までの私の訪欧の主目的の一つは西独ハンノーバーの図書館に所蔵されている夥しい数のライブニツ文獻にじかに接するということにあった。彼の書いた原稿、草案、書簡類はこの地にあるニーダーザクセン州立図書館に保管されているし、この図書館には特殊部門として「ライブニツ研究図書部門」が設けられていて、ライブニツとその時代についての文獻蒐集がなされている。それに対しては一般カタログとは別箇のリストが用意されている。また別にライブニツ・アルヒーフがある。これはベルリン アカデミー版として出版されつつあるライブニツ全集の基本の仕事を行っている部門である。またここにはライブニツ協会の本部がおかれている。ライブニツの原稿は非常に膨大なもので、その整理は今なお進行中であり、完全整理には今後百年を要するのではないかと言われている。この図書館に通うため私は市内の小さなホテルに二四日間滞在したので、もし私がヨーロッパの図書館について語るとすれば、他のところでもかなり多くの図書館をみるにはみたが、ここで直接に見たり、館長か

ら聞いたことを要約して記すことが、一番まとまったものとなるのではないかと思う。

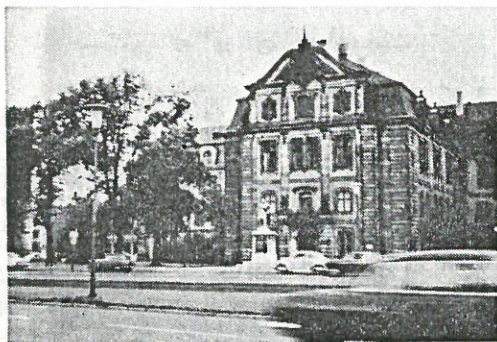
先づ簡単にこの図書館の歴史について述べよう。一六六五年がこの館の発足の時である。現在の州立図書館の建物は、その後拡張されてはいるものの、ライブニツの努力によって建てられ、一七一九年から今日に至るまで使用されているものであり、幸い第二次世界大戦の爆撃の損傷は少なかった。一七一六年に死んだライブニツはこの館の前身であるハンノーバー選帝侯ベルフェン家の王室図書館の第二代目の館長であり、なんと四十年間、その職をも勤めたのである。この図書館は一七二〇年から公開された。つまりこの図書館の前身はKönigliche Öffentliche Bibliothekなのである。今日ではドイツの王室図書館は国立図書館 Staatsbibliothek となっているが、ハンノーバーとスワットガルトの二つだけは例外であって州立図書館 Landesbibliothek となっている。この点の説明をこの館長から聞くとうとしたが、明確な答えは得られなかった。それはともかくとして、この図書館がニーダーザクセン州の中央

図書館の一つであることは言うまでもない。もう一つ中央図書館があるがそれについては後で述べる。ところでこの図書館が地域内の他の図書館と有機的に結ばれ十分に連絡のとれていることは、我々の目からみるとまさに一驚に値するのである。

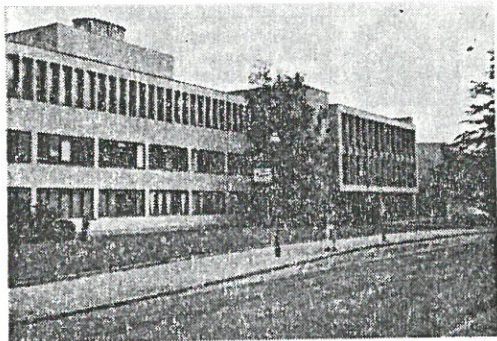
この図書館は特にライブニツ文獻で有名であるが、その歴史から推察されるように、その他にも種々の特色を持っている。その点について今ここではふれない。今日ではこの館は他の国立、州立図書館がそうであるように一般的図書館である。従ってこの州の住民への奉仕を仕事としていることは言うまでもないが、学校関係では大学程度の学校図書館、また都市の図書館、官公署のそれ、その他

特殊な図書館と密接に連繫しているのである。

これを学校、研究所関係についてみると、ゲッティンゲン大学、ハンノーバーにある工科大学、獣医大学、医科大学、芸術大学、師範大学、国立地質研究所が専門的図書と資料を購入し易くし、互に補い合う意味で、特に哲学、神学、法学の書物に収集の力点がおかれている。そこでこの図書館は一般的図書館ではあるが、広い意味での精神科学を中心とする中央図書館となっている。私の専門である哲学の雑誌だけを見てみても、二十九種類のものが読者のすぐ手の届くところにおいてある。うち十一種類がドイツ発行のもので、他はイギリス・フランス・アメリカ・イタリー・オランダのもので、東洋のものも残念ながら一つもない。またこの閲覧室では各大学の最新の「講義題目」が自由に見られるようになっている。単科大学は別として綜合大学の題目表が三十備えられている。現在西ドイツは十八の綜合大学を持つから、当然西独以外のものが入っている。オースターリー四、スイス三、東独のがベルリンのフンボルト大学をはじめとして五おいてある。このようにハンノーバーの図書館に入るだけで、ドイツ語域内の現在の各大学の講義、または次の学期の講義を知ることができるようになってはいる。ハンノーバーだけでなく、ニーダーザクセン州のどの図書館の本もここで借出



ニーダーザクセン州立図書館



ベルリン「自由大学」図書館

すことができる。勿論これは相互的のものである。このことは全ドイツ、ヨーロッパの図書館にも及んでいる。ところで西ベルリンの自由大学のことなのであるが、戦後に創建されたこの大学の図書館はこの点についてかなり徹底したやり方を行っている。広い二階のカタログ室には東ベルリンのを含めて全ベルリンの図書館のカタログが並べられている。自館以外の書物を借出すには自館の貸出票の外に緑色の貸出票（ベルリン以外のは赤色）を必要とするが、これが自動機械に収められていて、十ペニヒ入れてハンドルを廻すと五枚出てくる仕組みになっている。またここには他館との連絡のための運搬用自動車も備えられている。ハンノーバー州立図書館では国際的相互貸

借が行われていると言っているが、実はこの協定はヨーロッパ内だけのことを意味している。ベルリンの自由大学では最近、年間約二万冊の書物が読者の請求によってベルリン以外からとり寄せられているというから、相互貸借が頻繁に行われていることを知ることができる。こういう協定に加わっていない群小の図書館もその州の中央図書館の媒介によって全ヨーロッパから図書を借りることができるのである。

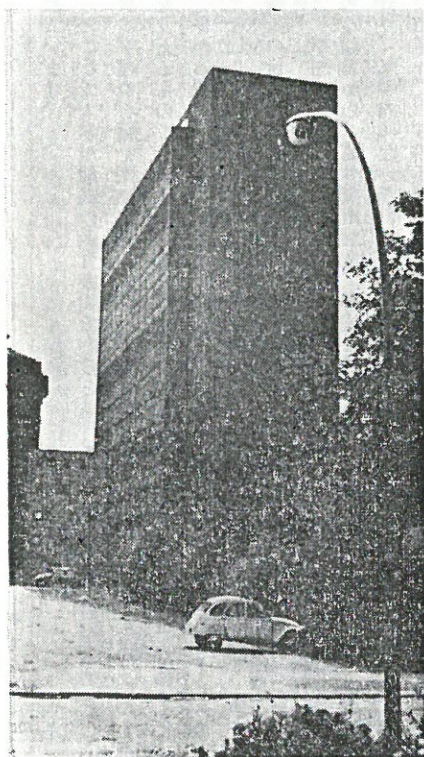
ハンノーバーにはもう一つ中央図書館がある。これはハンノーバー工科大学と工学情報の図書館である。これは自然科学と技術部門の中央図書館であって、一九六四年に約十億円の工費をかけて新築された近代的設備の図書館ではあるが、総合的見地からは州立図書館の方が上位を占めている。なぜならニードザクセンで発行されたすべての書物、この州についての文献、義務納本はここに集められているし、官公署の古来からの文書がすべてここに収納されていて文書館の半面を持っており、この州の図書館に勤務する司書の養成機関である図書館学校が附属しているからである。

ところで工学情報図書館は日本という科学情報センターであって、一九五九年にドイツ研究会の発議で設立されたものである。これはこの州の中央機関ではなく、ドイツ連邦全体の中央図書館なのである。例えば日本の自然科学関係の逐

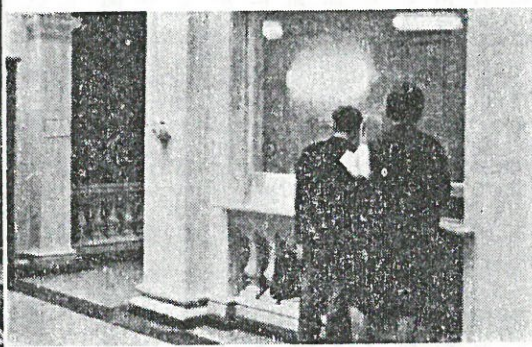
次刊行物は二八七タイトル収納されており、依頼すれば、主として英語へではあるが、翻訳に応じてくれるのである。この館に翻訳局があるばかりではなく、デルフトのヨーロッパ翻訳センターとも連携しているのである。このように工科大学の図書館は二つの部門を持ち、その一つの機能は全ドイツの中央館の役目を果しながら、この図書館全体としては、州立図書館とその仕事を分けあっている。これらとは別にハンノーバーは市立図書館を持っている。それは中央館と十三の分館、三つの移動図書館と二つの青少年図書館からなっている。このことは市役所の正面の広間に誰にでもすぐ分るようには図解されていて、直視的に現勢が知られるばかりでなく、直ちに利用者への便宜となっているのである。

ここに述べなかつたその他の多くの図書館も加ってハンノーバーの図書館全体が有機的に結びついている。そのことはハンノーバーの図書館が合同して、ハンノーバー図書館案内を毎年発行していることからだけでも知られるのである。

(図書館長)



ハンブルク図書館倉庫



ハンブルク図書館受付

第一、第二閲覧室

本学における図書館所蔵の大部分の和漢洋図書は第一閲覧室の書庫に保存され、その中の一部の和書約一万七千冊が第二閲覧室に開架されています。

第一閲覧室の書庫に所蔵されている図書は一般図書（和漢洋図書）、貴重図書、旧号雑誌、新聞（縮刷版）、パンフレット類ですがその中でも図書館ニュース創刊号で既に紹介されている松姫物語をはじめ、伊吹童子、羅生門等の外、数十点に及ぶ貴重文献や、学祖井上円了博士の文庫として大学内外からその資料的価値が高く評価されている哲学堂文庫などもこの第一閲覧室で奉仕係を通して閲覧することが出来ます。

第二閲覧室は昭和三十八年の四月にとりいれた最も近代的な閲覧方式「自由開架式」ですが、入室すれば図書は自由に手にとって読むことが出来るというシステムであり、これは簡便且つ能率的に適書を検索する方法として、ここを利用される学生、教職員の皆さんに、たいへん親しんでいただいています。又第二閲覧室には、当館所蔵約十七万冊という膨大な資料の中から主として教養書を中心に、利用度の高い専門書を選定して日常の学生諸君の学習作業や常識、情操の涵養に役立つ資料として、その効果を充分發揮しています。

この外第二閲覧室には、指定図書コーナーが設けてあります。この指定図書制度を当館の閲覧室に採用いたしましたのは今から三年前でしたが、大学教育が基本的に、教室内の講義と教室外の自学自習によって成立つ、いわば単位教育制度という現状から考慮いたしまして学生諸君の教室外の学習をよりいっそう促進させると共に、効果的な勉学ができる様な体制を確立するために、学部学科の専門担当の教員に、膨大かわまる資料の中から講義、演習等に直接関連する必読書を選定願ったところに、その目的の発端があったのです。しかるに、この指定図書の開架については、学生諸君の利用度が日増に高まり、改めて指定図書制度の重要さを認識させら

れています。

ところで大学が最高の教育機関であると同時に、高度の学術研究を目的として、真に学理の心髄を探究することにその使命があるといわれていますが、この使命を支えるものこそ大学図書館の奉仕活動であり、且つ奉仕係の使命でもあります。かかる観点から学内の活動としては、資料の充実と書誌的サービスの拡充を計り、又学生諸君の図書利用の相談、目録カードの引き方の案内や、学生教職員の皆さんに図書購入希望の機会を与え、この外、投書箱を設置し奉仕活動が、民主的、且つ円滑にできるよう心掛けると共に、学外での資料の利用性を高める趣旨から、館外貸出制度（詳細は係にお尋ねください）を設け利用者の便を計り、又学内には資料や、他大学の資料を閲覧したい場合には、大学相互間に締結されている相互貸借制度によって利用し得ることになっていきますので、ご利用の際はご遠慮なく係まで申し出てください。（なおこの場合一定の手続が必要です。）

思うに大学が最高の学府としての教育機関であると同時に学術研究という崇高な目的をもち、これを支えるものが図書館の奉仕活動であるという重大な使命にたつときこの職務の厳しさを常に感じます……しかし奉仕活動が図書館における実践的活動の先端にあるという重大な観点から、これをより以上に発展させかつ充実していかなくてはなりません。その為には、奉仕係員の質的向上に努力することは勿論のこと、奉仕係員の増加、図書館の諸施設の具体的解決こそ現実の課題と考えますが……だが現実には資料の増加と充実は日進月歩の途上にありながらも、図書館の諸施設が旧態依然としている実状をどのように把握したらよいのでしょうか……勿論相当努力は払われてはいますが……図書館奉仕活動が図書館に備えられた資料の内容以上に出ることも困難なのであり、又奉仕技術は図書館の有する設備に大きく影響されることは、否定できない。従って、図書館奉仕活動がより以上の近代的活動を展開していくためにも、早急に図書館施設の改善がなされるよう皆さんの真摯なご理解を期待しつつ、現実の図書館の殻の中で可能な限りの奉仕を展開していく所存です。

一九六七、一月

奉仕係 池 田